

# 張舜徽 〈宋代の学者の学問が備えていた広大なスケールと 後世の学界のために切り開いた新たな道〉 翻訳稿(上)

水 上 雅 晴

## 【翻訳の趣旨】

「漢唐訓詁学、宋明性理学、清朝考证学」は、中国の伝統的な学問の展開を端的に示す言葉として知られる。この言葉が示す通り、「考证学」（考拠学）は、清代においてその営為に従事する学者を輩出して赫々たる成果を生み出した。しかし考证に従事した学者は清代以外の時代にも存在しており、考证学の展開を考察する際、清代という時間的枠組みにしばられる必要はないのであるが、かかる見解にもとづく研究は乏しい。かかる状況において着目に値するのは張舜徽（一九一〇—一九九二）の研究である。彼は、清朝考证学独自のものだと考えられている成果の多くが、実は宋代の学者によってすでに提出されていたという説を長編の論文〈論宋代学者治学的博大气象及替后世学术界所开辟的新途径〉（《中国史论文集》、湖北人民出版社、一九五六年。以下「①文」）の中で示している。その議論は詳細にしてかつ体系的であり、考证学の展開を考える上で有用と思われるので、三回に分けて訳出を試みる。

①文は、横組みで印刷されており、標題の字体から知られるように、繁体字と簡体字が混用されている。本論文はその後〈論宋代学者治学的广阔规模及替后世学术界所开辟的新途径〉（以下「②文」）と題を少し改めて、同氏《初庵学术讲论集》（岳麓书社、一九九二年）に収録されている。本書は縦組みで繁体字のみが用いられている。文中の字句が一部改められているが、構成・内

容は同一と見てよい。《訖庵學術講論集》が《張舜徽集》第三輯（華中師範大学出版社、二〇〇八年）に収録されるにあたって、②文は横組みに組み直され、若干の誤字の修訂がなされたが、内容と字体は②文のままである。本訳稿は、《張舜徽集》所収の文章（以下「③文」）を底本とする。張舜徽は古典籍を引用するに際して、しばしば原文を省略しているが、必要のない限り、省略部分の注記や説明はしない。底本中の注記は（一）を用いて提示し、訳者による語義説明や補足説明のための訳文中の注記は（一）を用いて提示し、これら以外の訳注は、訳文の後にまとめて提示する。

宋代學術に対する言及がなされる場合、いささかの例外もなく理学が中心となっており、「心性の空談」の一言で宋代學術の全体を概括することができると見られている。かかる状況が生じたのは、十八世紀の中葉すなわち清代の乾隆年間に樸学（考証学）が盛んだった時、一般の学者が考拠に心を傾けて自分たちの学問を「漢学」と呼び、それに伴って「宋学」という名目を立てて専ら義理を語る読書人を統括し、彼らに「空疏不学」という四字の評語を加えて思うままに攻撃したことによる。陣営が完成して門戸が形成されると、この二百年間、学術面でそりが合わない状況が次第に形成された。人々が「宋学」を卑しんで遠ざけるようになったので、宋代學術の全体像が見えなくなってしまうのも当然のことである。実際のところ、宋代の学者は氣宇壮大であり、学問の幅が極めて広く方法も緻密であって、すべての清代の考証学者が、条理がしっかりとっていて釈義と考拠が深いと自ら誇る、旧来の学問を整理する方式と方法は、どれもこれも宋代の学者が従事した学問の範囲を超えることはできておらず、清代の考証学者が各分野の学問においておこなった講究は、いずれも宋代の学者たちによってすでに道が切り開かれ、条件が整えられていたものであった。宋代の学者によるこの功績は、中国學術史に特筆大書すべきであり、無視したり埋もれさせたりしてはいけない。ここでは特に彼らが切り開いた道の中、明白で重要な点を総合して分析を加えることにする。最初に史料整理における彼らの偉大な成果を総括し、最後に自然科学に関する卓越した貢献を叙述することにする。このようにすることで、両宋の學術の真面目をあらまし見ることができるようになる。理学については、当然のことながら宋代學術の重要な部分を占めており、それ以後の心性を講究する学者たちのために無数の道を開いたが、現代の学者

が專著を出して詳述しており、とりわけ思想史や哲学史をまとめた学者たちが詳細を極めて余すところなく解説しているのが、本稿では取り上げない。

## 第一 古代の文化遺産受容に関わる各種の作業

### 甲 古書の時代と作者を考証する作業

古代の文化遺産は、大部分が書籍の中に保存されている。しかし古書が著された時代や材料の信憑性に関しては問題があり、これらは学者たちが最初に解決しなければならない大前提になっている。この問題解決は、我が国の早い時期に始まっている。孟子は周の末期の時点できつとくに「尺く書を信ずるは書無きに如かず」と述べていて、古代から伝わる書物を軽々しく信じてはならず、合理的に疑うべきことを暗示した。《漢書・藝文志・諸子略》は、遙か昔の子部の書物いくつかに対して、「依託」であるとか、「晩出」であるとか注記している(1)。唐代の劉知幾や柳宗元は、学問の面で懷疑的精神に極めて富んでおり、多くの古書の真偽を仮定したり考察したりしている。しかしこれらは結局のところ、やはり啓蒙的な作業であつて、その営為が系統的にして条理のある作業に發展し、方法が緻密に向かい、範圍が拡張し、学術面で濃厚な疑古の雰囲気を出すようになるのは、宋代の学者に至つてからのことである。宋人は、敢然として疑古に踏み込み、偽書弁証の方面に大きな道を切り開き、後人に様々な問題分析の方法と啓示を与えた。

封建社会において、統治階級にとつて重要な何種類かの教科書——經典は、この上なく至尊にして神聖不可侵な著作と見なされた。特に唐初に《五經正義》が修定され、《周易》《尚書》《毛詩》《礼記》《左伝》の五部の書物が五經(これらは漢代に学官に立てられた五經とは異なる(2))に定められてから、一般の知識人は、これらすべての經典を尊重し、疑いを差し挟むことがなかった。宋代の学者は大胆にも一つの經典全体が後代に作られたものだと思つたり、一部が偽作であると疑つたりし、伝注を攻撃する者もいれば、序を卑しんで退ける者もいて、いくつかの經典が著さ

れた時期に関する見方に動搖を与えはじめた。このことは、「真実の探求」から出発して、古書の材料の出所の検討に着手する学者たちにとって、大きなプラスとなった。

《周易》は、古人が「人、三聖を更<sup>へ</sup>、世、三古を歴<sup>ふ</sup>」（《漢書・芸文志》）と見ていたものであり、古い古い文化遺産である。ここにいう「三聖」は、伏羲・文王・孔子を指す〔韋昭《漢書音義》。従来からの旧説によると、伏羲は最初に八卦を画した創造者であり、文王は八卦を重ねて六十四卦に押し広げて易を發展させ、孔子に至ると、行き届いた解説を施して、易の内容をより一層豊富にした。孔子がおこなった作業は「十翼」にあり、《易経》の文字の理解を助ける十篇の文章を書いた（《象辞》《象辞》《繫辞》をそれぞれ上下に分けて都合六篇、さらに《文言》《序卦》《説卦》《雜卦》の四篇を加えて、合計十篇）。《史記・孔子世家》《漢書・芸文志》《同・儒林伝》《隋書・経籍志》《經典釈文》《周易正義》などの漢唐の学者による論著は、いずれもこれらのことを肯定していたが、宋人に至って疑問を抱きはじめた。最初に歐陽修が大胆にも《十翼》は孔子の作ではないという論点を提出した。《居士集》卷十八《易或問》に次のようにある。

或る人の質問…「繫辞伝」が聖人の作でないとしたら、前代の大儒や君子がそのことを論じなかったのは、どうしてでしょうか。回答…「繫辞伝」だけにとどまらない。舜が倉の壁を塗ったり深い井戸を掘るように言いつけられて、殺されかけたこと（《史記・五帝本紀》）は、六経に記されておらず、孔子の徒によつて語られていないから、世間の言い伝えだったのであろう。長く伝えられて、孟子の徒が述べたのであって、それらの事には元來、でたらめな説が含まれていた。当初、大儒や君子は、世間で信じられていなかったので放置していた。久しく伝承された後の時代になると、以前とは逆に、大儒や君子でさえも誤りだとしないのでから、事実であつてでたらめでない、と考えられるようになった。これ以後、曲学の士の多くがその説に惑溺するようになった。孔子が亡くなると、周はますます衰え、王道が失われて学問も廢れた。ついで戦国時代になると、百家の異端が起つた。十翼の説は、誰が言い出したのか不明だが、秦漢以來、大儒や君子が取り上げることは無かつた。或る

人の質問…「それならば、どうして聖人の作ではないとわかるのですか」。回答…「学問に対する大儒や君子の態度は、理に達することを求めるだけである。中人以下には、六経に記されている聖賢の事蹟を指し示し、その耳を引き寄せて教えてあげても、まだもやもやしたものを抱えてしまう。言い伝えに惑溺している曲学の士は、変わった説を提出して相手を負かすことを好む。『何の謂ぞ。子曰く……』」（《乾卦・文言伝》）とあるのは、講師の言葉である<sup>(3)</sup>。私は以前、そのように学習者に教えた。『元なる者は、善の長。亨なる者は、嘉の会。利なる者は、義の和。貞なる者は、事の幹』とある。これがいわゆる「文言」である。魯の穆姜がこの言葉を言ったのは襄公の九年（前五六四）に当たり（《左伝・襄公九年》）、それから十五年目に孔子が生まれた<sup>(4)</sup>。左氏が伝<sup>(5)</sup>を施した《春秋》は、確かにでたらめな記述が多いが、信じられる書物を何とか後世に伝えようという気持ちは看取される。《文言伝》が孔子の作であることを左氏が知っていたら、後からそれを穆姜に結びつけて後世に疑いを残すような真似をするはずがない。左氏は《文言伝》が後世になって孔子の作とされること自体を想定していなかったようである。孟子は『尽く書を信ずるは書無きに如かず』と言っているが、孟子は六経を批判することを好むわけではない。混乱した説を退けるのは、経を尊ぶからである」。

歐陽修はさらに《易童子問》三巻を作り、その下巻は専ら十翼が孔子の作ではないという考えを説いている。彼の見解によると、「<sup>(6)</sup>どうして《繫辞》だけがそうであろうか。《文言》・《説卦》以下はいずれも聖人の作ではなく、衆説が入り乱れていて、これらも一人の言辞ではない。昔、《易》を学んだ者が講説に役立てようとつきはぎでこしらえたものであり、一家の説ではない。そういうわけで、同異も是非も入り乱れ、選択がきちんとしていないので、經書をそこない世間を惑わせる結果を招いている。しかしながら、十翼は聖なる經典に付着したまま、長きにわたって伝えられてきたので、今となつては根源まで遡つて真偽を究明することはできない。そのため、明智を備えた士であっても、雑駁な議論に執着して十翼の壮麗なる言葉に心を奪われる者もいれば、疑義を弁じて正すような真似は君子が慎むことだと考え、端からその点を気にしない者もいる」。ここでは「十翼」と呼ばれるものが《周易》を研究す

る後代の人々の集团的作業による創作であつて、一時にできたものでもなく、一人の手になるものでもないが、實際のところ、後の人が《易》を治める上での重要な参考資料であるから、簡単に排除できるものでもないことを明確に肯定している。だから歐陽修がさらに言うことには、「経書を学んだ古の人は、いずれも《大伝》を書いた。現在、《書》と《礼》の《伝》はまだ残っている。ここで《繫辞伝》といわれるのは、漢初には《易大伝》と称されていたものである。後漢になると、すでに《繫辞伝》と呼ばれていた。《繫辞伝》を《易大伝》と呼んでいたのであれば、《書》や《礼》の《伝》より遙かに勝っているが、これを聖人の作と見てしまうと、僭越の書になつてしまう。《大伝》が諸儒の作であることを学ぶ者に知らせて、良い部分を取り、間違っている部分を取り除くことを心掛けさせれば、それが書かれた三代〔夏殷周〕の末は、古の聖人たちの御代から時間的に離れておらず、老師や名家が世々伝えた学園、長者や先生が伝えた論説がその中に混ざっているから、学ぶことは無駄とは言えないであろう。もし聖人の作だと考え、選択しようとせずに尽く信じてしまうと、大いに経書をそこない世間を惑わせることになつてしまう。このことは、はっきりさせておかななくてはならない」（いずれも《歐陽文忠全集》卷七十八〔《易童子問》第三〕に見える）。

歐陽修はこれらの述作を無理に孔子一人に帰属させる見解に反対するが、その価値を全面的に否定することにも賛成しない。これはやはり問題を全面的に見る方法である。後に趙汝談が著した《南唐易説》三卷があり、陳振孫《直齋書録解題》によつて「専ら《十翼》が孔子の作ではないことを論じている」と称されている。当然のことながら歐陽修の後塵を拝し、その作業を継続して発展させた著述である。

《尚書》は上古の書物であり、伝承によると、当初は多くの竹簡・木簡に記されていたが、孔子が整理して百篇に撰定した。後に秦の焚書に遭遇した時、最も多くが失われたのがこの書物であつた。漢初に伏生は二十九篇だけ伝え、当時通用の隸書で書き記して《今文尚書》と称した。武帝末期に至り、魯の共王劉餘が孔家の壁の中から蝌蚪文字で記された沢山の竹簡を発見し、それを《古文尚書》と称した。すぐれた知識人である孔安国は、当時通用の字体で一通り読み合わせたところ、伏生が伝えたものより十六篇多くなつた（以上は班固の説による<sup>8)</sup>）。しかしこの《古文尚書》は、当時、朝廷に献上されたものの、学官に列せられることは絶えてなく<sup>9)</sup>、まもなく失われてしまった。



東晋の元帝の時（在位…三一七～三二二）になると、突然、豫章の内史梅賾が《古文尚書孔安国伝》を献上してきた。伏生のものより二十五篇多く、伏生が伝えた諸篇の中から五つの篇を独立させてあり、序も記されており、全部で五十九篇、四十六卷あった。この書物は長期にわたって世間に流通し、唐の人が《尚書正義》を編纂し、陸徳明が《経典釈文》を著した時、いずれもこのテキストを用いた<sup>(10)</sup>。宋の人に至ってようやく疑念を抱きはじめ、最初に疑念を示したのは呉棫である。彼は大胆にも以下のように指摘した。

孔安国が増し加えた《書》は、現在、篇目が揃っている。いずれも文章の通りが良く、伏生が伝えた《書》の文章がごつごつして読みづらく、読解できないものすらあるとは異なる。そもそも四つの時代に書かれた文章〔虞書・夏書・殷書・周書〕が収録された《書》は、作者が一人や二人ではないのに、結局二つの文体に落ち着いているというのであろうか。それはありそうにないことだ<sup>(11)</sup>。

呉棫、字は才老、《書禪伝》十三卷があり、《直齋書録解題》（卷二）と《文献通考・経籍考》（卷百七十七）のいずれにも著録されている<sup>(12)</sup>。現在は伝わっていないが、宋代には極めて高い価値が認められていた。朱熹はこの書物を買って、《晦庵先生文集》（四部叢刊本）卷三十四《答呂伯恭（第三十書）》において「近頃、呉才老が《胤誓》《康誥》《梓材》などの篇について説いているのを読んだが、その論証は極めてよらしい」と述べている。朱熹も呉棫と同様の見解を持って、晩出の《古文尚書》が後人による偽作だという疑念を示したのは、恐らく呉才老から多くの影響を受けたためであろう。《晦庵先生文集》卷六十五《尚書》に以下のようにある。

今考えてみるに、漢儒は伏生の《書》が今文、安国の《書》が古文であると見ている。現在の目で見ると、今文は多くが晦洪であるのに対して、古文は逆に平易である。今文は伏生の娘が晁錯に口授した<sup>(13)</sup>時から失われていると言う者もあるが、先秦時代の古い書物に引かれる《書経》の文章は、いずれも同様だった〔古文が晦洪で、

今文が平易だった」から、必ずしもそのように考える必要はない。記録の確実さを考えると、語られた言葉に対して工夫を凝らすことが難しいが、潤色の優雅さを求めると、文章を見映えよくすることは容易だから、訓詁や誓命に分類される文章に難易の違いが認められると考える者もいる<sup>14</sup>が、これが実情に近い。しかしながら、伏生が暗唱していた部分については難しい文章だけが採られているのに対して、蝌蚪文字で書かれていた古い書物が乱れて文字が失われた残りを孔安国が考定した部分については、逆に理解が簡単な文章だけが採られているのは、理解に苦しむところである。小序の文が経文とはなはだ齟齬していること、孔安国の序とされるものも全く後漢の文章らしくないことに対して疑問が寄せられても不思議でない。

このような論調は、その《文集》や《語類》の中で何度も提示されており（たとえば《文集》卷八十二〔書臨漳所刊四経後〕や《語類》卷七十八〔尚書一・綱領〕など）、呉才老の見解と軌を一にしているかのようである。しかし彼はいわゆる《古文尚書孔安国伝》や《孔安国序》を疑うところまで踏み込んでおり、それが魏晋の頃の人によって書かれたものであって、漢の人の文章のようではないと考えている（いずれも《語類》卷七十八〔尚書一・綱領〕）。かかる論断は、清代の学者が《古文尚書》を考訂するためのお膳立てになった。したがって清初における弁疑の闘士である閻若璩は、その著《尚書古文疏証》卷八〔第一百十三条（言疑古文自呉才老始）〕において「《尚書》の古文経は、東晋の建武元年〔三二七〕を五十三、四年さかのぼる魏晋の頃に出現し、はじめて朝廷に献上され、学官に立てられた。建武元年から宋が都を南に移すまで八百十一年が過ぎ、その時に呉械、字は才老が世に現れ、はじめてこの書物に対して疑いを抱いたのは、まさしく天がその御心を明らかにされたのである」と述べている。《四庫全書総目》卷十二〔古文尚書疏証提要〕は、閻氏の仕事を以下のように要点を押さえて総括している。「《古文尚書》は《今文尚書》より十六篇多かったが、晋魏以降、師説が絶えてしまった。そのため《左伝》の中で引かれるものに対して、杜預はおしなべて『佚書』と注している。東晋の初頭に、その書がはじめて出現した時には、二十五篇多かったが、当初は《今文尚書》と並立していた。陸徳明がそれにもとづいて《經典釈文》を作り、孔穎達がそれにもとづいて《尚



書正義》を作った時、ついに伏生が伝えた二十九篇と合併した。唐以来、經書や古学に疑念を持つ劉知幾の一派さえも、《尚書》を一家に立てて《史通》の中に列しているが、古文が僞であるとは言っていない<sup>(15)</sup>。呉棫が異議を唱えはじめてから、朱子も次第に疑いを持つようになった。呉澄たちは朱子の説にもとづいて次々と問題点を暴き出したので、《古文尚書》が僞作であることがますます明らかとなったが、系統立てて分析を加え、その瑕を抉り出すことはできなかった。明の梅鷟<sup>ばいせう</sup>をはじめ諸書を参考にして剽窃の作であることを証明したが、見識がやや狭く、資料の搜索が不十分であった。閻若璩に至ってようやく經書や古学に引拠し、矛盾点を一つ一つ指摘したことで、《古文尚書》が僞作であることがはじめて明瞭になった。閻氏が議論を展開した百二十八条に対して、毛奇齡が《古文尚書冤詞》<sup>しよんし</sup>を著し、手段を尽くして反駁しようとしたが、結局、強弁を弄しても道理を覆すことができなかったということは、拠り所のある言論が先に不敗の態勢を築き上げていたのである<sup>(16)</sup>。弁疑の營為において達成した閻氏の偉大な業績<sup>(16)</sup>は、やはり呉棫・朱熹などが道を切り拓いていたのであり、宋代の学者が創始した功績は埋もれさせてはいけないことがわかる。

《詩》三百篇の中に存在する問題はさらに多い。思想が束縛されて、本来、生命活動を活発にし感情を吟詠する詩篇の生気が奪われ、どれもこれも「礼義に止まる」(《毛詩・大序》)作品に変わってしまったが、実は《詩》の大小の《序》が障物物だったのである。《大序》は書物全体の序文であると同時に、《毛詩》首篇に位置する《閔雎》<sup>かんしよ</sup>の序文でもある。《小序》は三百十一篇の個々の詩に対する序文である(その中の六篇は、文章が失われているものの序文はまだ残っている<sup>(17)</sup>)。これらの《序》は長い間伝承され、結局誰の手になるのか、これまでどのところ定説がない。全く《四庫全書總目》卷十五《詩序提要》<sup>(18)</sup>に説かれているように、「《詩序》に関する説は紛糾している<sup>(19)</sup>。《大序》は子夏の作、《小序》は子夏と毛公の合作と考えるのは、鄭玄《詩譜》である(《毛詩・閔雎・小序》「閔雎、后妃之德也」句下鄭箋)。子夏が書いた《詩》の序がとりもなおさず今の《毛詩》の《序》だと考えるのは、王肅《家語注》である(《七十二弟子解》)。衛宏が謝曼卿<sup>しゃまんけい</sup>に学んで《詩序》を作ったと考えるのは、《後漢書・儒林伝》である。子夏が作ったものを毛公と衛宏が増修したと考えるのは、《隋書・經籍志》である。子夏は《詩》の《序》を書かなかつ

たと考えるのは、韓愈である〔《韓昌黎集・外集》巻一〈詩之序議〉<sup>(20)</sup>〕。子夏が裁定したのは〈小序〉の第一句だけであり、残りは毛公が書いたと考えるのは、成伯璵である〔《毛詩指說・解說第二》〕。〈詩序〉は詩人が自分で書いたと考えるのは、王安石である〔《晁公武《郡齋讀書志》巻一上〈詩類・毛詩詁訓伝二十卷》〕。〈小序〉は国史の旧文であり、〈大序〉は孔子の作だと考えるのは、明道程子<sup>(21)</sup>である〔《河南程氏遺書》巻二十四〈伊川先生語十・鄒徳久本〉〕。第一句は孔子が与えた題であると考えるのは、王得臣である〔《塵史》巻二〈経義〉〕。毛伝がおこなわれた当初にはまだ〈序〉がなく、後に門人が互いに伝授して、各々師説を記したと考えるのは、曹粹中である〔《段昌武《毛詩集解》巻首〈詩之序〉〕。田舎の無学者が書いたものだと考え、声高にほしいままに攻撃するのは、鄭樵と王質に始まり、朱子がそれに附和した<sup>(22)</sup>。このように争論をしても収まりのつかない問題であったが、南宋に至ると、学者があつさりと脇へ追いやってしまった。〈序〉を攻撃した南宋の学者で最も有力だったのは、鄭樵と朱熹である。鄭樵〔字は漁仲〕には《詩弁妄》があり、専らこの問題に対して極めて鋭い批判を加えており、その後に出た朱熹は鄭氏の説を採用している。《朱子語類》巻八十〔〈詩一・綱領〉〕に以下のようにある。

以前、鄭漁仲という一老儒がおり、〈詩序〉を全く信じず、古書にならつて書物の末尾にまどめていた<sup>(23)</sup>。私も今はこのようにするばかりである。人には虚心に本文を読ませておけば良いのであつて、しばらく経つと自然と意味がわかるようになる。どうやら〈序〉と呼ばれているものには、世俗の儒者の誤りが多く、詩人の本意を理解していない箇所が極めて多い。〈大序〉に「礼義に止まる」とあるが、果たして礼義にとどまっていることができているのであるか。〈桑中〉の詩に、礼義はどこにあるのだろうか<sup>(24)</sup>。

同巻にはまた以下のようにある。

〈詩序〉は全く当てにならない。以前、鄭漁仲の《詩弁妄》を見たが、〈詩序〉をひどく批判していて、言葉遣い

も穏やかでないので、田舎の無学者の作だと考えていた。最初から疑っていたが、後になってから一、二篇を細かく読み、《史記》や《国語》に照らし合わせてみると、《詩序》が結局信用ならないことがわかった。

さらに次のようにも言っている。

だいたい古人が詩を作るのは、今の人が詩を作るのと同様であり、そこにはもとより外物に触発されて感情を表現し、性情を吟詠することがあるのであって、いつも他人をそしているわけではない。しかし《序》を作った者が凡例を立て、一篇一篇を褒貶の観点から説こうとして、詩人の思いを穿鑿しすぎて台無しにしてしまった。それはあたかも、今の人は誰かが何かをおこなったのを見ると詩を作って賛美か誹謗をする、と考えるようなことであり、全く道理に合わない。

このような見解は、《朱子語類》や《朱子文集》の中に常に見受けられる。朱熹が後に《詩集伝》を作った時、《序》を廃して直接詩を説いた。こうすることで、後人が《詩》三百篇を研究するための障壁を取り除き、束縛を解除したのである。清代における著名な歴史学者崔述は《読風偶識》を著し、鄭・朱両家の説を発展させながら、媒介物なしに詩意を理解する鍵を探し求めた<sup>(25)</sup>。

《周礼》を疑う宋代の学者は多いが、洪邁の発言が最も簡要にして明白である。《容齋統筆》巻十六（周礼非周公書）に以下のように説かれている。

《周礼》の書について、世間で周公が作ったものだと言っているのは誤りである。昔賢は戦国時代の陰謀の書だと考えていた。実際の状況を考えてみると、劉歆りゅうけんの手に成ったのであろう<sup>(26)</sup>。《漢書・儒林伝》には、諸経の専門家による師匠から弟子への伝授がすべて記されているが、《周礼》だけは記録がない。王莽の時になって、劉

歆は国師となり、はじめて学官に《周官》経を立てて、それを《周礼》と称し、さらに博士を置いた。河南の杜子春は劉歆に学び、家に戻って門人に教授した。好学な鄭興とその子の鄭衆が師事しに来て、この書が遂に世におこなわれるようになった。劉歆が心を砕いて謀りごとをめぐらし、王莽の悪影響を押しさえよとしたのだが、王莽は《周礼》を利用して天下に苦しみを与えた。五均・六筦・市官・賒貸などの諸々の施策がいずれもそうであった<sup>27</sup>。したがって当時、公孫禄は、劉歆が六経をかき乱し、師法を壊してしまつたと批判した〔《漢書・王莽伝下》〕。代々の王朝では、宇文周〔北周〕だけが六典〔官職を六官に分ける《周礼》〕によつて官制を建てた<sup>28</sup>が、人民を治め政令を発する際に、王莽の古いやり方に従うことはなかった。王安石は、祖宗の法を引っかき回そうとして、《詩》・《書》と同じ程度まで《周礼》の文言を尊重し、《三経新義》を作つた。嗚呼、二王〔王莽と王安石〕は《周官》の名に託けて政治をおこない、ひとしく禍を人民にもたらしたのである。

このように《周礼》すべてを偽託だとする論断を後人に向けてはつきりと指し示している。七百年後、清末の学者廖平の《古学考》や康有為の《新学偽経考》は《周礼》が劉歆によつて作られたことを認めているが、やはり宋人の旧説に従つて、それを発展させたのである。

次に、《左伝》に疑いを抱いた宋代の学者に話題を転じると、そのような学者はいくらでもいる。王安石〔字は介甫〕は左氏が六国時代〔戦国時代〕の人であると最初に指摘した。彼には《左氏解》一卷の著があり、現在は見ることができないが、王応麟は《困学紀聞》巻六において「王介甫が左氏を六国時代の人であると疑う十一の事情」があることを指摘していて、安石には疑いを抱く理由がたくさんあり、その理由が堅固であつたことがわかる。その後、葉夢得《春秋考》〔巻三〕は以下のように説いている。

《春秋》の経文は哀公十四年〔前四八一〕で終わり、その年に孔子が亡くなつてゐる。伝〔《左伝》の文章〕は〔哀公〕二十七年〔前四六八〕で終わつており、それは孔子没後十三年目である。文章は韓・魏・知伯・趙襄子〔？

（前四二五）の事に及んでいて、魯悼公（？）前四三七）・楚恵王（？）前四三二）にまで言及している。年代を考えると、楚恵王が亡くなったのは、孔子没後四十七年であり、魯悼公が亡くなったのは、孔子没後四十八年であり、趙襄子が亡くなったのは、孔子没後五十三年である。記事を調べると、哀公が越に孫<sup>のが</sup>れて治世を終えたことを簡単に記して伝を締めくくっているが、記録はさらにひろくその後のことにまで及んでいる。趙襄子が孔子から最も隔たっているが、記録されている内容は、襄子の時代のことにとどまらない。左氏が襄子よりどれだけ後の人であるかは不明であるものの、孔子と同じ時代を生き、弟子の世代でもないのに、ここまで長生きする者がいたはずはない。左氏を丘明と誤解したのは司馬遷に始まる。現在、その書物を調べると、「商鞅の変法を実施した」秦孝公〔在位・前三一六―前三三八〕以後に起こった事が非常に多く見えるから、戦国時代の周秦交代期の頃の人であるとして見てもほほ間違いないだろう。

鄭樵《六経奥論》<sup>29</sup>〔巻四〈左氏非丘明弁〉〕も以下のように説いている。

《左氏》の記録は、韓・魏・智伯の事まで及んでいて、趙襄子の諡<sup>30</sup>まで示している。獲麟の年〔哀公十四年〕から襄子が亡くなる時までですでに八十年経過している。もし丘明が孔子と同時代の人であったならば、孔子が没してから七十八年後になっても、まだ書物を著すことができたということはある得ない。これが左氏が六国時代の人であることの第一の明証である。《左氏》は、「麻隧に戦ひ、不更の女父<sup>ぢよほ</sup>を獲」（成公十三年）と記し、また「秦の庶長の鮑・庶長の武、師を帥<sup>ひき</sup>めて晋の師と櫟<sup>れき</sup>に戦ふ」（襄公十一年）と記す。秦は孝公の時になって軍功褒賞制と爵位制を立てたのだから、これらの時点で不更〔四級〕とか庶長〔十・十一級〕の称号があったはずはない。これが第二の明証である。《左氏》は「虞は臘<sup>ろう</sup>せざらん（虞国は年末の臘の祭まで持たないだろう）」（僖公五年＝前六六五）と記しているが、秦は恵文王の十二年〔前三二六〕になってはじめて臘祭〔十二月におこなう百神に対する祭祀〕を挙行している（《史記・秦本紀》）。これが第三の明証である。《左氏》が鄒衍〔前三〇五

年（前二四〇）の虚誕の説を師の教えの如く守って帝王の子孫たちを称する<sup>(31)</sup>のは、第四の明証である。《左氏》において歳星の分野（中国古代の天文学説において天上の区域と地上の地域を対応させることおよび対応させた区域）について言及される時、いずれも堪輿説に準拠している。考えてみると、韓と魏が晋から分かれた後、堪輿説における歳星の十二次の配当が定まったが、それは「晋から」趙が分かれたことから始まったのであり、《左氏》には趙の分野に対応する「大梁」について言及されていることは、第五の明証である<sup>(32)</sup>。《左氏》に「左師展將に公を以ひて馬に乗りて帰らんとす」（昭公二十五年）とあるが、考えてみると、三代の時に戦車はあったが、騎兵はなかった。蘇秦が合従策により六国に同盟を結ばせた時に、はじめて「車は千乗、騎は万匹」（《史記・張儀列伝》）という表現が現れている。これが第六の明証である。《左氏》に晋が秦と国交を断絶するために派遣された呂相が長口上を垂れたこと（成公十三年）・声子（公孫婦生）が楚<sup>(33)</sup>の人に説いたこと（襄公二十六年）が叙述されているが、彼らの詐術に富んだ雄弁は、まったく「戦国時代の」游説<sup>(34)</sup>の士が人を丸め込んだ言葉である。これが第七の明証である。《左氏》の書は、「楚師燔す（楚の軍隊が戦意を喪失した）」（昭公二十三年）・「猶ほ瀦を拾ふがごとし（こぼれた汁を拾うような無茶なこと）」（哀公三年）等の語が見える<sup>(35)</sup>ように、晋楚の事に関する叙述が最も詳細であるから左氏は楚の人である<sup>(36)</sup>（魯の人ではない）。これが第八の明証である。

これら一連の議論には、いずれも斬新で特殊な見解が展開されている。《朱子語類》卷八十三（春秋・綱領）にはさらに「秦にはじめて臘祭がおこなわれたのに、《左伝》に『虞は臘せざらん』と記されているから、秦の時の文章であることが明らかである」と説かれている。このように、《左伝》が書かれた時代をより後ろに持っていくている。宋代の学者はいくつかの重要な經典に対してですら、このように大胆な懷疑を示しているから、その他の周秦時代の古書については、なおさら簡単に信を置いたりしない。たとえば《管子》は最も問題が多い書物であり、蘇轍・葉夢得などの宋人は、いずれも戦国時代の人の作であると疑っている<sup>(37)</sup>。朱熹に至っては、より明確な主張を打ち出しており、《朱子語類》卷百三十七（戦国漢唐諸子）に以下のように説かれている。



《管子》は管仲が著したのではない。彼は当時、齊の政治に当たって仕事に追われていて、少し暇があれば三人の夫人に惑溺していたので、決して余暇に書物を著すような人ではなかった。書物を著すことができるのは、用いられない人である。《管子》には、老荘の説話も含まれているから、戦国時代の人が管仲当時の言行録の類を寄せ集めて著し、他の書物の記述を補足したにすぎないのではないだろうか。

その後、葉適しやうてき《習学記言》〔卷四十五《管子》〕も「《管子》は一人の筆に成るものではなく、一時にできた書物でもない」と考えている。黄震《黄氏日鈔》〔卷五十五《読諸子一・管子》〕も「《管子》の書は、誰が編集したのかわからないが、文章が入り乱れて重複しているので、一人の手になるものとは思われない」と述べている。これらの発言は、周秦時代における諸子の書の編纂に関する通例を端的に明らかに示しており、遠い昔の書籍の大半が一人の手に成るものではなく、後人によって付け足された部分が多くを占めており、作者が誰であるかに関する考証に励む必要がないことを人々に教える。

## 乙 古代のいくつかの重要な経典を整理する作業

経学研究に發揮されている宋人の特殊な精神は、先人に寄りかからず、個人の創造と発明を重視することである。それは一つには、いくつかの經典に対する大胆な懷疑に現れているが、この点についてはすでに説いた。二つには、漢唐の旧説を一切棄てて顧みず、漢唐の注疏家の奴隸になることに甘んじず、古人の原書に直接向き合って、独自の解釈を打ち立てることである。かかる精神は、二千年間の学術史の中で宋代の学者にのみ見られるものであり、学術の進歩をもたらした主要な要素でもある。しかし当時の保守的な学者たちは、かえって攻撃を加えた。北宋の学者、たとえば司馬光は、「科挙を新たに受ける若者は、聞きかじったことをそのまま言葉にしています。《易》を読んでは、卦爻すら知らないのに、十翼が孔子の言ではないと言ひ、《礼》の書物を読んでは、その篇数すら知らないのに、《周官》は戦国時代の書物だと言ひ、《詩》を読んで、〔冒頭にある〕《周南》や《召南》すら終えていないのに、毛伝

は章句の学だと言ひ、《春秋》を読んで、魯の十二公すら知らないのに、三伝は高い柵にしまひ込んで構わないと言つております」（《伝家集》卷四十二）（論風俗劄子）と述べている。南宋の学者の王応麟も「漢儒から慶曆（一〇四一—一〇四八）の頃まで、經書について語る者は、訓詁を守つて穿鑿付会することがなかつた。《七經小伝》が現れて、いささか新奇さを求めるようになった。《三經新義》がおこなわれると、漢儒の学を土や芥のように見なすようになってしまった」（《困学紀聞》卷八）と述べている。かかる見解は、もし「述べて作らず」（《論語・述而》）という観点を保持して問題に向き合うなら、当然のことながら正確であるが、もし學術の發展進歩という角度から仔細に考察するならば、司馬光や王応麟のような議論は、極端に保守的なものである。

それどころか宋代の学者は、漢唐の旧説に対して軽々しく全面的に否定することはせず、反対に漢代の注と唐代の疏に対して適切な評価を与え、さらに重視している。たとえば朱熹は非常に博く學問に通じた學者にして、極めて勇猛な弁論者であるが、經書を學ぶにあつて、まず古い注釈を研究することの重要性と必要性を強調している。《朱子文集》卷六十九（學校貢筭私議）に以下のように説かれている。

經書を學ぶには、家法を守ることが必須であり、天下の理は、もとより人の一心に外ならないが、聖賢の言には、奥深く高尚であつて臆断してはならないものがあるからである。經書に記されている制度や事物の名称、出来事の本末は、今となつては見聞が及ばない昔のことである。したがつて經書を學ぶ者は、必ず先儒が提出した説にもとづいて推論する。たといそれらがすべて正しいとは限らぬとしても、正誤が生じた原因を追究すれば、思索をめぐらせて誤りを正すことができる。そのため漢の諸儒は一家を立て、それぞれ師承によつて伝えられた説を守り、軽々しく改めようとしなかつた。しかしあまりに保守的なため、思慮を凝らして眞実を求めることができなかつたのは欠点である。

朱熹にはこのような持論があるので、人々に向かつて細心の注意を払つて注疏を読むように懇々と論している。《文集》

卷七十五〈論語訓蒙口義序〉では、「注疏にもとづいて訓詁に通じ、《積文》を参照して文字の発音を正す」と述べている。同巻の〈論語要義目錄序〉でも「文義や名称の詳細については、注疏に答を求めるべきであり、注疏には無視できない部分がある」と述べている。《語類》卷五十七〈孟子七・離婁下〉でも「今の世の博学の士は、おおむねしっかりと書物を読まず、しっかりと注疏に目を向けない」と述べている。卷百二十九〈本朝三・自国初至熙寧人物〉でも「国朝の始祖以来、学問をする者は、注疏を大事にすることだけを心がけ、その後で道を論じた。二蘇〔蘇軾と蘇轍〕などは、ただちに道を論じようとしたが、どうして注疏を廃することができようか」と述べている。これらの議論から、朱熹が普段からこのように注疏方面の学に力を入れていたことがわかる。

長きにわたって注疏の学に没入していたので、朱熹は漢儒の長所を当然理解しており、彼らを顕彰することに力を尽くした。《文集》卷三十一〈答張敬夫書〔十二月〕〉では、「漢儒は、経を説くことに長けていると言うことができる。ただ訓詁を説くばかりだが、人々はこの訓詁を用いて経文の意味を尋ねて玩味することができると言うことができる。訓詁と経文を別々にせず、一連なりにみることで、深長なる意味に到達できる」と述べている。《語類》卷百三十五〈歴代二〉でも「漢儒は義理を窮めることを最初から求めはせず、読むことができることだけを求めた。たくさん記憶することが学問であった」と述べている。同巻ではさらに「漢儒が書物に注釈するのは、理解し難い箇所限定しており、本文全体に注釈し尽くすようなことはなく、注釈の言葉も甚だ簡単であった」とも述べている。朱熹はこのような認識を持っていたが、もし注疏を深く学んでいなかったら、どうしてこのような深い理解に到達することができたのだろうか。

鄭玄（字は康成）は、漢代の経学を集大成した学者であり、後の清代乾嘉期の学者が「漢学」の旗印を掲げた時に尊敬を集めた中心的な人物である。しかし鄭玄を心から推賞し、彼に敬服したのは、朱熹に始まる。《語類》卷六十四〈中庸三〉では、「鄭康成が『天子に非ざれば礼を議せず』〔《礼記・中庸》を解釈して、『聖人が天子の位にある場合に限り構わない』と説いている。このように簡明に解釈することができれば、ちょうど良い』と述べている。卷八十七〈礼四・小戴礼〉でも『《礼記》は古注以外に見るべきものはないのですか』と尋ねられたのに対して、『鄭注はもとより良いものである。注と疏を見ればおのずとわかるようになる』と答えている。同巻ではさらに「鄭

康成はすばらしい人である。礼の名称や度数を考察して大いに功績を挙げており、一つ一つのことをすべて理解していた。漢の律令なども注解していて、多くの精力を費やしている。東漢の諸儒はとてすばらしく、盧植もすばらしい」とも述べている。朱熹は、鄭氏が経書に注釈した功績は埋もれさせることができないと認めているばかりでなく、鄭康成には礼楽を制作する非凡な才能があるとまで認めている。それゆえ《語類》卷八十四（禮一・論修礼書）では、「鄭康成たちに礼を制作させたら、一応の形を成すことができるはずであり、周公が再び世に現れるのを待つ必要はない」と述べている。朱熹はこのように鄭氏を尊崇していたので、言葉に表すだけでなく、後に《儀礼経伝通解》を編纂する時、鄭注を持って来て経文を補うことまでしている<sup>(38)</sup>から、ほとんど鄭氏を聖賢と同等の人物と見なししていた。清代の学者は、至る所で「鄭学」を標榜していたが、結局のところ、朱熹のように鄭氏の学問を深く理解していた者は、やはりあまり多いとは言えなかった。

宋代の学者は、鄭康成が経書を解釈した書物で現在まで保存されているものをいくつか力を尽くして顕彰し発明したばかりでなく、鄭氏が注釈した書物で散佚して時間が経過しているものをも手立てを講じてその他の書籍の中に探し求めて抽出し、編集して書物の形にまとまるようにした。たとえば鄭康成には《周易注》があり、《隋書・経籍志》では九巻と著録されており、《新唐書・芸文志》では十巻と著録されている。宋の《崇文総目》では一巻だけ著録し、文言・序卦・説卦・雜卦の四篇を存するばかりで、他の諸篇は皆散佚しており、《中興書目》には著録されていない。この書物は大体、北宋と南宋の間に亡佚してしまったのであろう。南宋の王応麟は、他の書物を利用して《周易鄭注》一卷を輯成した。王氏には《三家詩考》一卷もあり、専らすでに散佚していた齊・魯・韓の三家詩の遺説を集めている。これはとりもなおさず中国學術史における輯佚作業の幕開けである<sup>(39)</sup>。この輯佚という作業の発端が漢人の経説と鄭氏の易注を搜索するという事業にあったことは、宋人が「漢学」と「鄭学」を重視していたことを十分に説明する。後に清代の学者がこの道筋に従っておこなった作業は、さらに広範にして緻密であり、唐以前に散佚していた伝注と諸子の佚文の大部分を回復したと言え、學術方面の貢献は非常に大きかった。彼らが努力した道筋は、やはり宋人が切り開いたものである。

宋人は諸経の整理の点で他にも顕著な功績があり、それは群言を集め、集解体の形式を取る大部な書物を多く世に出したことである。たとえば房審権の《周易義海》百卷は、上は鄭玄から下は王安石に至るまで、収録している注釈や説は百家に達する。黄倫の《尚書精義》五十巻も漢から宋までの様々な見解を採用している。王与之の《周礼訂義》八十巻は、全部で五十一家の旧説を集めている。衛湜の《礼記集説》百六十巻は、百四十四家の説を集めている。これらの書物は、規模が大きく材料も豊富な編著であり、少なからぬ古注と旧説を保存していて、経書を学ぶ人々に対する裨益は大きく、《集解》《纂疏》を作成する作業に従事する者のためにも新たな道を切り開いた。

### 丙 群書を校勘する作業

書物を校勘する作業は、漢代以降では宋人が最も精励していて、作業の範囲も最も広い。北宋の全盛期には、崇文館を開いて書籍を校勘整理し、大規模なこの組織的な事業に参加してもらうために、当時の名儒を招聘した。この時、沈括や蘇頌のような博学な大科学者たちが手分けして協力し、それぞれの得意分野で才能を発揮したので、大きな成果があがったのも当然のことである。書物の校勘が終わるたびに序録を付したのは、漢代の劉向・劉歆が校書の時に「篇目を整理し、各篇の要点をかいつまみ、それらを記録して上奏した」(《漢書・芸文志》)のと手法が非常に似ている。当時において最も特徴的なのは、個人が校書する風気も盛んだったことであり、その成果もとりわけ顕著であった。重要なものを挙げると、経部の書物には、鄭樵《書弁詁》、張淳《儀礼識語》、朱熹《孝经考異》、毛居正《六经正誤》、岳珂《刊正九经三伝沿革例》がある。史部の書物には、趙抃《新校前漢書》、余靖《漢書刊誤》、張泌《漢書刊誤》、無名氏《西漢刊誤》、劉巨容《漢書纂誤》(この五家の書は早くに亡佚しており、書目が《宋史・芸文志》に見える)、劉攽《漢書刊誤》、呉仁傑《兩漢刊誤補遺》がある。子部の書物には、黎錞《校勘荀子》、陳襄《校定夢書》・《校定相笏經》・《校定京房婚書》(いずれも《宋史・芸文志》に見える)、陸佃校《鬻子》(《直齋書録解題》に見える)、錢佃《荀子考異》、沈揆《顔氏家訓考証》、朱熹《陰符經考異》・《周易參同契考異》がある。集部の書物には、洪興祖《楚辭考異》、黃伯思《校定楚辭》・《校定杜工部集》、方崧卿《韓集舉正》・《外集舉正》、朱熹《韓文考異》、彭叔

夏《文苑英華弁証》がある。これら二十余家の書物だけでも目を見張るほどの充実ぶりであるが、その他、あまり名の知られていない著作も数え切れないほどある。

上に列挙した二十余家の中、鄭樵や朱熹などは、とりわけ校勘に長じた著名な専門家である。鄭樵は學術史上不朽の功績を残しており、それは「校讐」を専門の学問として承認したことである。彼は「校讐」を《通志》二十略の一つに列しており（卷百六十四）、文章はあまり長くはないが、書籍における文章の配列・類例・存亡などの問題について極めて明確に論じていて、古書を校讐する行為を「學術を考察し、源流を弁別する」<sup>(40)</sup>道筋に引き入れたのは、彼の創見である。清代の史学者章学誠の議論と著述は、この大きな道に従ったものである。鄭樵に至っては、自分の手を動かして古書を校勘する具体的な作業に従事し、かなりの精力を費やしている。この方面の著述には、《書考》六卷、《書弁訛》七卷がある。王应麟《玉海》卷三十七は、「鄭樵《書考》六卷は、今古文の異同を考証している」と指摘しており、《直齋書録解題》卷二も《書弁訛》の内容を「糾謬が四、闕義が一、復古が二」であると説明している。この二書は現在伝わっていないが、その体例については、概要を推察することができる。

朱熹は、極めて緻密かつ慎重に多くの書物を校勘しており、まず随意に文字を改めてはいけないという道理を示している。《文集》卷三十（張欽夫に与へて程集の改字を論ず）に言う。

一般的に古書にはつきりしない箇所があれば、その場その場で論述を加え、読者の理解を助けるのは構わない。もしはつきりしない箇所をいきなり改めて原文をわからなくしてしまつたら、十分に明らかになつていない意味があるのかないかがわからなくなつてしまう。漢儒が經書を解釈する際、文字を改めたい箇所があつても、ただ「某、当に某に作るべし」と言うばかりだったが、それでも後世の批難を受けることがある。いきなり文字を改めたらどれだけ批判を受けるか、わかつたものではない。漢儒だけがそうなのではなく、孔子は《書經》を刪定したが、「血流漂杵（周の武王が殷の紂王を討伐した際、戦死者が流した血がおびただしく、杵が漂うほどだった）」（武成篇）の句については、そのまま改めなかつた。孟子はこの記述を受け、「吾、武成に於いて二三



策を取るのみ」〔《孟子・尽心下》〕と述べるが、結局、この文を削除して、自分の見解に都合の良い形に改めるようなまねはしていない。

しかし経伝に対して注解を作る時、朱熹は、通常、誤りだと認められる字句をためらわずに直接改めている。《語類》卷八十七〔《礼四・小戴礼・総論》〕に言う。

「経文は軽々しく改めてはならないのですか」と問う者がいた。先生がお答えになった。「経文を改めることは、確かに学問をする者の不敬の心を啓くことにつながる。しかし以前、鄭康成が《礼記》を解釈するのに経文の文字を改めている点ばかりを攻撃する者がいた。たとえば「蛾子、時に之を術ふ」〔《学記》〕の句についても改めることなく、「蛾子」を鄭玄のように「大蟻」と見るのではなく、「蚕蛾子」〔蚕蛾〕と理解した上で、蚕の類の生死が循環して息まないような状況だと説いているが、何を言っているのだろうか。またたとえば《大学》に「拳げて先んずること能はざるは、命なり」とあるが、もし「鄭玄のように「命」字を「慢」に」改めなかつたら、どのような意味をなすのだろうか」。

ここでは、校書に従事する中で、むやみに古本〔古くから伝わるテキスト〕を信じてはならないことが指摘されている。《語類》卷百五〔《朱子二・論自注書・総論》〕でも、経文を改めるのがやむを得なかつたことを説明している。朱熹は、「私が経書の文字を改めるのは、意図があつておこなっているのであつて、軽々しく改めたりしていない。なぜ改めたのか、その意図を汲みとって欲しい」と述べている。この言い方を見ると、朱熹が非常に慎重な態度を取っていることがわかる。しかし彼は《孝経》と《大学》については、自身の見解に従つて整理したもの、その結果、元来の形からかけ離れてしまったので、後人から批判された。清代の学者黄廷鑑は、《第六弦溪文鈔》卷一〔校書説二〕において次のように述べている。

朱子の刪定は、後人が書物の文字を改めるようなものとは訳が違ふ。たとえば《大学》に対する伝の首章・第三章・第四章の下には、いずれも「旧本では○○句の下に在り」と注している。《孝経》の経一章の下には、「旧本では○箇の章に分けていた。これこれの句を削除し、《詩》を引いたのが○箇所、《書》を引いたのが○箇所ある」と注している。改訂する箇所にはすべて、必ず詳しく「旧本では……」と注しているから、改めてはいないけれども本書の旧態を保存しているから、改めていないとみることもできる。校書をして書物の文字を改めない点において、朱子に勝る者はいない。儒家の經典を解釈する場合だけがそうなのではない。《陰符経考異》と《周易参同契考異》を観ると、校書するだけでなく文義の解説もしている。《韓文考異》では、字句の訂正をおこなっている。いずれの場合においても博く諸本を参照し、文字の異同を詳しく句下に列挙している。朱子の学識があれば、一つの正しい形に定めることは難しくないが、疑問点を指摘するにとどめて独断で解決しようとするのは、この上なく慎重な態度である。

朱熹が校書に關しておこなつた周到な作業については、清代の学者だけが理解し、清代の学者だけが模倣することができた。清代の校勘学者で有名な盧文弨ろぶんけんや顧広圻こくこうきは、いずれもこのような慎重で緻密な精神を繼承している。阮元げんげん主編の《十三経注疏校勘記》は、諸本間の文字の異同だけを示して、軽々しく本文の文字を改めないが、それにかかる精神を具体化したものである。

書物を校勘する作業が宋代に至つて著しく發達したのは、当時、印刷術が盛んにおこなわれたことと切り離すことができない。書物が広く流通するようになったが、文字の誤りが日々多くなつたので、書物を購入し収蔵しようとする者は甚だ真面目に校勘に取り組み、校書に十分な時間を取ることができなければ、多くの蔵書を持つことを願わなかつた。王明清《揮塵前録》卷一（「士大夫家蔵書多失於讎校」）に、その事情が以下のように記されている。

太平の時、南都の戚氏、歴陽の沈氏しん、廬山ろざんの李氏、九江の陳氏、番陽の呉氏のような士大夫の家には、いずれも

藏書家としての評判があった<sup>(セ)</sup>が、今は皆散逸している。近年はそこかしこで、書籍の刊行が盛んにおこなわれていて、なおかつ書物を転写するのも容易になっていく。仕官して或る程度の地位に就いている者は、家に必ず蔵書が数千巻あるが、校勘がきちんとされていないものが多い。呉明可が紹興知府として会稽<sup>わかし</sup>に赴任した時、放置されてきた様々な事業すべてに取り組んだが、書物を伝えることだけはしなかった。明清<sup>わかし</sup>が以前その理由をお尋ねしたところ、「この作業をおこなうのは、役人にとって何の造作もない。しかしわたしには書類作成の期日があり、賓客の応接もあって、自分で校勘をおこなっている暇がない。子弟には科擧の模範答案の作成をさせていて、作業に集中させなくてはならない。他人に任せようと思っても、心を込めておこなおうとする者がいないので、箱の中がどんどん書物で一杯になっている。〔中途半端に校勘をおこなって〕後人を誤るのであれば、やらない方がましだ」とおっしゃった。

王氏《揮麈後録》巻七〔王氏書為陳元所得〕にも、「ご先祖さまは若年にして科擧に合格し、役人として四方に赴任された。典籍に関心を持っておられたので、計画的に収集し、蔵書は数万巻にも及んだ。すべてご自分の手で校勘を施され、郷里に収蔵していた。汝陰の士大夫は、ご先祖さまに書物を借りて伝える者が多かった」と称されている。陸游《老学庵筆記》巻八にも「賀方回は……校書を好み、〔校勘作業に用いる〕朱黄の墨が手から離れることがなかった」とある。これらの記載から、宋代の蔵書家が校勘にも努め励んでいたことがわかる。かくして後世の蔵書家が校書と刻書に留意する気風が生じたのである。

#### 丁 群書の目録を作成する作業

多くの書籍の名称を系統的に分類・羅列して簿冊にまとめたものを「目録」と称する。この二字が一つの専門用語になったのは、漢代からである<sup>(43)</sup>。「目録」の二字を専門的な学問に連ねて「目録学」と称するのは、宋人が始めたことである。《蘇魏公譚訓》巻四〔文学〕に、「祖父は王原叔に謁見して、政治を論じた。途中で、原叔は側に呼ん

で典籍を調べさせ、祖父を指して『この若者には目録の学がある（此兒有目録之学）』と言った」とある。このことから、北宋の時にすでに「目録学」という専門用語があったことが知られる（現代の姚名達が著した《目録学》と《中国目録学史》が「目録学」が一つの名詞になったのは、王鳴盛《十七史商榷》（しょうかく）に始まる（せと）と説いているのは、大いに誤っている）。

宋代の学者は、目録学が専門の学問であることを肯定するだけでなく、この分野において大いに業績を挙げ、新たな道を切り開いた。目録と呼ばれる書籍は、三つの大きな類型のいずれかに属する。一、官簿・政府が専門技能を持った人材を広く集め、国立図書館内で校書をおこなって作成させた書目である。たとえば劉向・劉歆の父子が西漢の末に編定した《別録》と《七略》がそれである。二、史志・史家が歴史書を著す時、現存の書籍の名を登載し、その史書的一篇を構成するものである。たとえば班固《漢書・芸文志》がそれである。この二種のスタイルは、いずれも宋人によって継承された。前者には、北宋仁宗の時、王堯臣・王洙・歐陽修らが詔を奉じて編纂した《崇文總目》があり、後者には南宋高宗の時、鄭樵が私撰した《通志・芸文略》がある。これらはいずれも前人が築いた体例にならって編定した目録である。宋人は、この二大分類以外に、新たに一つのスタイルを作った。それは私録である。私録は、個人的に編纂された蔵書目録であり、独立した書物になったものである。晁公武《郡齋讀書志》や陳振孫《直齋書錄解題》などは、後世の私家讀書志や蔵書志の類の著述の先駆けとなった。

宋代の学者が編纂した書目で、官簿と私録という二つの大きな類型に属するものには、いずれも詳細な解題が付されている。《崇文總目》などの官簿は、その原本を見ることはできないが、《宋史・芸文志》に《崇文總目》六十六卷が著録されており（巻百五十七）、《崇文總目》に著録する書名の下には、必ず論説が加えられている。《郡齋讀書志》や《直齋書錄解題》などの私家の書目は、各書の作者の事蹟や書物の内容を特に詳しく紹介している。官簿と私録は、いずれも専門的な編纂物であり、紙数に制限がないので、煩をいとわずに考察を加えることができるので、後の讀書家にとって大いに役立つ。《四庫全書總目提要》のような清代の官簿は、この伝統を継承している。私家蔵書志のグループに属する目録は、次から次へと出現し、作者の略歴と本書の内容の紹介にとどまらず、印刷本の版式や印刷時

期の方面にまで記載内容が拡大している。

従来、目録学を研究していた人々は、その基礎を築いたものとして《漢書・芸文志》を仰がない者はなかった。《漢書・芸文志》は劉歆《七略》を底本として改編したものであるが、《七略》は現在見ることができず、圧倒的な大部分が《漢書・芸文志》の中に保存されているので、もし後人が劉歆・班固の義例を探し求めようとしたら、おのずとそれが最も重要な典籍になるのである。最初に《漢書》の中からこの篇を抽出して単行させ、証拠にもとづいて解説・考証して専著にまとめることまでおこなったのは、宋代の学者王応麟であった。王氏には《漢書芸文志考証》十巻があり、古い文章を拾い集めて顔師古注の不備を補っており、清代の目録学者章宗源《隋書經籍志考証》や姚振宗《漢書芸文志条理》といった類の書籍の出発点となった。

王応麟は、本書において《漢書・芸文志》の本文と顔師古注を解説・考証する以外の作業もしている。それは史伝の中に書名が見えておりながら、《漢書・芸文志》に著録されていない文献をすべて分類して追加することである。そのような文献は全部で二十六部あり、それぞれの下に注記を加えて、「不著録〔《漢書・芸文志》に著録されていない〕」の三字を加えて区別している。この種の作業も、後人が同様の仕事をするための方向を指し示している。清代の姚振宗の《漢書芸文志拾補》六巻は、王応麟が示した道に従って努力して完成させたものである。

宋人が考証の学に関しておこなった仕事は着実であり、とりわけ南宋の諸儒には、考証の文章形式にも一定の規範があった。その規範が目録の書物に現れたものとして、馬端臨《文獻通考・經籍考》が挙げられ、各書の解題において、煩をいとわず広く文献を援引しており、当該の書物と関係がある序跋・題記・論説の文章をすべて探し集めて、書名標示の次行から一格下げて記している。馬氏自身の意見、考証や収獲は、すべて按語の形で最後に付している。このような形式を取る考証の方法は、宋代以前には見られなかった。この方法は清代まで伝えられ、朱彝尊はそれを用いて《經義考》を作り、謝啓昆はそれを用いて《小学考》を作った。その後、同様の書籍が日増しに増えていった。宋代における最も傑出した目録学者として、鄭樵が筆頭に挙げられる。彼が書籍の分類方法に関して、創造的な発明をし、人まねを一切せず、恐れずに新たな体例を立てたことは、目録学史における驚異的な事として数えなければ

ならない。それまで唐以後における図書目録の編纂は、經史子集の順序に従う四部分類法を受け入れており、それは漢代における七略に見られる分類の体例とは明らかに異なっていた。鄭樵は、それらをすべて否定するので、『通志・校讎略』において「《七略》の分け方はもとよりいい加減であるが、四庫〔經史子集〕の部類もでたらめではないだろうか」と述べ、『通志・総序』において、自身の意見を提出して以下のように述べる。

學術がいい加減なのは源流がはつきりしないからであり、書籍が散亡するのは配列に規律がないからである。《易》は一つの書物だが、十六種の学がある<sup>(45)</sup>。伝学があり、注学があり、章句学があり、図学があり、数学があり、讖緯学があるが、これらを分類せぬまま易類と総称してはいけない。《詩》は一つの書物だが、十二種の学がある<sup>(46)</sup>。詁訓学があり、伝学があり、注学があり、図学があり、譜学があり、名物学があるが、これらを分類せぬまま詩類と総称してはいけない。道家には、道書があり、道経があり、科儀があり、符籙<sup>ふうりやく</sup>があり、吐納内丹があり、炉火外丹がある。全部で二十五種あつて<sup>(47)</sup>、いずれも道家に属するが、まぜこぜに一家にしてはいけない。医術には脈経があり、灸経があり、本草があり、方書があり、炮炙<sup>ほうしやく</sup>があり、病源があり、婦人があり、小児がある。全部で二十六種あつて<sup>(48)</sup>、いずれも医家に属するが、まぜこぜに一家にしてはいけない。

ここでは、図書分類が必ず細密でなければならぬ理由を説明し、いくつかの例を示している。鄭樵は『通志・芸文略』を編纂する際、最終的にそれまでに使われていた一切の狭い分類を除去し、様々な書物を經・礼・樂・小学・史・諸子・天文・五行・芸術・医方・類書・文の十二項目に分類し、一つ一つの分類項目の下に非常に詳細な細目を設けた。〈校讎略〉〔《通志》卷七十一〕では、「全部で十二類、百家、四百二十二種」と称している。この分類法は、当時においては顕著な進歩であったが、学界から注目されることはなかった。しかし後代の高い見識をしっかりと備えた学者たちは、鄭氏の議論や見解に影響を受けた変化を呈した。たとえば清代の学者の孫星衍が『祠堂書目』を編纂した時、四部分類の旧套を守らず、群書を經学・小学・諸子・天文・地理・医律・史学・金石・類書・詞賦・書画・小



説の十二項目に分類したのは、明らかに《通志・芸文略》の分類と体例を遠く受け継いで、さらに発展させている<sup>(49)</sup>。

注

(1) 《漢書》の著者班固は、道家に著録されている「文子九篇」句下に「老子弟子、与孔子並時、而称周平王問、似依託者也」と注している。《芸文志》に「晚出」の語は見えないが、雑家に著録されている「大命(禹)三十七篇」句下に「伝言禹所作、其文似後世語」と注し、禹の作と伝えられているが、文章は後代のもののようにであると指摘している。

(2) 孔穎達らによって編纂された《五經正義》の五経は《周易》《尚書》《毛詩》《礼記》《左伝》を指している。漢代において学官に立てられた五経博士は、前漢の段階では基本的に今文経を担当しており、《春秋》は《公羊伝》と《穀梁伝》が主流であつて、劉歆の働き掛けによって平帝の時に《五經正義》を構成する《古文尚書》と《左伝》が学官に立てられたが、それは一時的なことであつた。史書に見える漢代の五経博士に関する記述は、張金吾《兩漢五経博士考》に網羅的に収集されている。

(3) 《易経・乾卦・文言伝》では、「初九曰：『潜龍勿用』、何謂也。子曰：『龍、徳而隠者也。不易乎世、不成乎名、遯世无悶、不見是而无悶。樂則行之、憂則違之、確乎其不可拔、潜龍也。』」のように、初九から上九までの各爻の爻辭の意味内容に対する質問を受けて、「子曰」から始まる講説がなされている。

(4) 《公羊伝》と《穀梁伝》によれば、孔子が生まれたのは襄公二十一年である。襄公九年を起点にすると十二年後に当たるから、引用原典の《居士集》の原文「後十有五年而孔子生」句の「五」は誤記と判断される。

(5) 張舜徽によると、中国の伝統的な注釈の体例には十種あり、伝述の意からその名がついた「伝」もその一つに含まれる。「伝」は、内容の面から見ると多種多様であり、《左伝》の「伝」は、本文の中で説かれている事柄を論述し、経の本意を発明する証拠を示している。《中国古代史籍校説法》第一編第一章第四節《鑽研伝注》(《張舜徽集》第一輯、華中師範大学出版社、二〇〇四年)、246頁。

(6) 以下は、「繫辭」は聖人の作ではないのですか(繫辭)非聖人之作乎」という童子の質問に対する回答。

(7) 《書》の《大伝》は《尚書大伝》を指す。《尚書大伝》は秦の博士伏生(伏勝とも称される)の作と見るのが通例であり、歐陽修が編纂に関わっている勅撰の目録《崇文総目》巻一《書類》においても「《尚書大伝》三卷、漢濟南伏勝撰」と著録されている。《礼》の《大伝》は、《後漢書》巻百九《祭祀志下》「古者師行平有載社主、不載稷也」句下劉昭注に「《周礼》為礼之

經、而《礼記》為礼之伝」とあるのによると、《礼記》を指す。歐陽修は「《礼記》、雜乱之書」（《文忠集》卷百五十〈書簡七〉又与姚編札）と述べているように、《礼記》に対する評価は低い。以上の二書が秦漢の頃の作であるのに対して、「今謂之《繫辭》、昔謂之《大伝》者、亦皆曰聖人之作也」（《文忠集》卷四十八〈居士集四十八・策問十二道・南省試進士策問三首・第三首〉）や「或問曰：『今之所謂《繫辭》者、果非聖人之書乎。』曰：『是講師之伝、謂之《大伝》、其源蓋出於孔子、而相伝於易師也。其来也遠、其伝也多。』（《文忠集》卷六十〈外集十・経旨・易或問〉）に徴すると、歐陽修は《易》の《大伝》である《繫辭伝》については、由来をたどると孔子に行き着くと考えている。

- (8) 班固《漢書・芸文志》に「《書》之所起遠矣、至孔子纂焉。上斷於堯、下訖于秦、凡百篇、而為之序、言其作意。秦燔《書》禁学、濟南伏生、獨壁藏之。漢興亡失、求得二十九篇、以教齊魯之間。……武帝末、魯共王壞孔子宅、欲以広其宮、而得《古文尚書》及《礼記》・《論語》・《孝經》凡數十篇、皆古字也。……孔安国者、孔子後也、悉得其書、以考二十九篇、得多十六篇」とある。

(9) 注(8)の《漢書・芸文志》の続きに「安国猷之、遭巫蠱事、未列于学官」とある。

- (10) 《書経》の成立と伝承に関する張舜徽の解説は、その《中国古代史籍学要》第二章第三節《張舜徽集》第一輯、華中師範大學出版者、二〇〇四年）、26～30頁に見える。

(11) 馬端臨《文獻通考》卷百七十七《経籍考四》原注に「呉氏曰」に始まる同様の佚文が見える。

(12) 《宋史》卷二百一《芸文志・経類・書》にも「呉棫《裨伝》十三卷」と著録されている。

(13) 伏生が娘を通じて晁錯に《古文尚書》を伝えさせた、という説は、《漢書》卷八十八《儒林伝・伏生》顔師古注に見える。

(14) 朱熹《晦庵文集》卷六十五《雜著・尚書》原注に「大抵《書》之訓誥多奇渋、而誓命多平易。蓋訓誥皆是記録當時号令於衆之本語、故其間多有方言及古語、在当时則人所共曉、而於今反為難知。誓命則是當時史官所撰、槩括潤色、粗有体制、故在今日亦不難曉耳」とある。

(15) 劉知幾《史通》卷一《六家》に「諸史之作、不恒厥体、推而為論、其流有六。一曰尚書家、二曰春秋家、三曰左伝家、四曰国語家、五曰史記家、六曰漢書家」とあり、史学に六つの流派があり、《尚書》がその一つを占めることが説かれている。同書卷十三に《疑古》と《惑経》の二篇が収録されており、その中で経書、とりわけ《春秋》の記述に関する弁疑がなされているが、《古文尚書》に対する弁疑はなされていない。

(16) 《古文尚書》に対する閻若璩の弁疑については、吉田純《清朝考証学の群像》第一章《閻若璩の尚書学》（創文社、二〇〇六

年)を参照。

(17) 《詩経・小雅・鹿鳴之什》の序に「南陔」、孝子相戒以養也。(白華)、孝子之潔白也。(華黍)、時和歲豐、宜黍稷也。有其義而亡其辭」とあり、これらの三篇は、篇名だけが伝わっていて、詩の文句が伝わっていない。《詩経・小雅・南有嘉魚之什》の序に「由庚」、万物得由其道也。(崇丘)、万物得極其高大也。(由儀)、万物之生、各得其宜也。有其義而亡其辭」とあり、これらの三篇も篇名だけが伝わっていて、詩の文句が伝わっていない。

(18) 《四庫提要・詩序》については、重野宏一《四庫全書總目提要》(詩序) 詁注(《筑波中国文化論叢》第三十四号、二〇一五年)あり。

(19) 劉毓慶によると、《詩序》の作者については様々な見解が出されていて、朱彝尊《經義考》には、《詩序》に論及した清以前の学者三十八家の発言が記録されており、それらをまとめると二十数種の説にまとめられる。同氏《歷代詩経著述考》(先秦——元代)(中華書局、二〇〇五年)、14～15頁を参照。

(20) 重野宏一が指摘するように、韓愈《詩之序議》に対しては、韓愈の作ではないという偽作説が宋以降提出されている。前掲重野詁注、112頁上～113頁上を参照。

(21) 直後の詁文中に注記したように、当該の記述は《伊川先生語十》の副題を持つ巻に収録されているのだから、程明道の語ではなく、程伊川の語である。詳しくは、前掲重野詁注、116頁上～117頁上を参照。

(22) 少し後に引かれる《朱子語類》卷八十に見えるように、鄭樵は《詩序》を攻撃しており、朱熹はその見解に賛同している。鄭樵の発言は、《詩弁妄》(佚書。顧頡剛による輯本あり)に含まれていたと考えられている。王質も《序》を退けていることは、その《詩総聞》卷十《由儀》「甚矣、《序》之欺後世也」などからうかがわれる。《詩総聞》に対する《四庫提要》の解題に「其廢《序》言《詩》、則鄭樵唱而質和之也」とある。

(23) 《史記・太史公自序》・《方言・序》・《漢書・叙伝》・《潜夫論・叙録》などにおいて例示される通り、秦漢期の書物の多くでは、各篇の内容の概要を解説する序文を末尾に収録していた。この点については、嘉瀬達男《秦漢期の序と著作のあり方》(《文化研究》第十三号、樺蔭女子短期大学、一九九九年)などを参照。

(24) 《詩経集伝》卷二「桑中」「桑中」三章、章七句「句下の注釈に「《樂記》曰：『鄭衛之音、乱世之音也。比於慢矣。桑間濮上之音、亡国之音也。其政散、其民流、誣上行私而不可止也。』按桑間即此篇、故《小序》亦用《樂記》之語」とあり、朱熹は《桑中》が《礼記・樂記》にいわゆる「亡国之音」に相当すると考えている。小序に「桑中、刺奔也。衛之公室淫乱、男女

相奔、至于世族在位、相竊妻妾、期於幽遠、政散民流、而不可止」とあつて、〈桑中〉は男女の間の「礼義」が失われている状態をそしつた詩だと解説されており、朱熹はその見解を踏襲している。

- (25) 《読風偶識・自序》に「余独以為朱《伝》誠有可議、然其可議、不在於駁序說者之多、而在於從序說之尚不少。……故余於論《詩》、但主於体会經文、不敢以前人附會之說為必然。雖不尽合朱子之意」とあるように、崔述は《序》を退けて經文のみによつて《詩經》所収の詩を理解する方法論を提唱しており、それが朱熹の意思にかなうと考えている。《読風偶識》における《詩經》解釈の状況については、藤井良雄〈崔述《読風偶識》の著述意図について〉（《中国文学論集》第六号、九州大学中国文学会、一九七七年）を参照。

- (26) 劉歆偽作説を含め、《周礼》の成立・作者の問題の諸相については、宇野精一《中国古典学の展開》（《宇野精一著作集》第二卷、明治書院、一九八六年）を参照。

- (27) 王莽が《周礼》の理念にもとづいて実施した「五均」以下の経済政策については、《漢書》卷二十四下〈食貨志下〉に記されており、それらに関する解説は、東晋次《王莽・儒家の理想に憑かれた男》第十一章〈新王朝の諸政策〉（白帝社、二〇〇三年）を参照。

- (28) 《周書》卷二〈文帝紀〉に「三年春正月丁丑、初行周礼、建六官。以太祖為太師・大家宰、柱国李弼為太傅、大司徒趙貴為太保、太宗伯独孤信為大司馬、于謹為大司寇、侯莫陳崇為大司空」とあるように、北周の恭帝三年（五五六）に《周礼》にもとづく六官制が制定された。

- (29) 《六経奥論》が鄭樵の作でないという点は定説になっている。この点については、朱彝尊《曝書亭集》卷四十二〈六経奥論跋〉やそれを踏まえて議論を發展させている《四庫提要・六経奥論》などを参照。

- (30) 《左伝・哀公二十年》に「楚隆 告于呉王曰：『寡君之老無恤、使陪臣隆敢展謝其不共』」とあり、文中の「無恤」が趙襄子の諡。

- (31) 底本は「帝王子孫」に作るが、引用原典である《六経奥論》にしたがつて「帝王子孫」に改めて訳す。《六経奥論》は「帝王子孫」句下に「案齊威王時鄒衍推五徳終始之運。其語不経、今左氏引之、則左氏為六国人、在齊威王之後」の一節が続く。齊威王（在位・前三五六〜前三二〇）の時に活動した鄒衍の言葉が《左伝》に引かれているから、左氏は戦国時代の齊威王より後の時代の人である、という推測を示すこの文章を張舜徽が省略して引用しているので、「第四の明証」がわかりづらくなっている。《左伝》の中で「帝王子孫」に言及されていることについて、単周堯は、〈昭公二十六年〉の晋の武将である魏献子

と史官である蔡墨との問答に見える「五行の官」、具体的には「木正曰句芒、火正曰祝融、金正曰蓐收、水正曰玄冥、土正曰后土」がそれに相当すると解説している。同氏「楊伯峻先生《春秋左伝注・前言》訂正」《能仁学報》第十六期、二零一七至一八年度）を参照。

(32) 《左伝・昭公十一年》に周の大夫長弘が「歳及大梁、蔡復、楚凶、天之道也」と述べ、歳星が大梁に移る二年後になったら、蔡が復活し、楚が凶事に見舞われるのは、天の常道だと説いている。引用原典の原文「案韓・魏分晋以後、而堪輿十二次、始於趙分曰大梁之語」には文章の乱れがあると愚考し、この部分、適宜調整して訳した。堪輿説において、大梁が趙に配当されることは、《周礼・春官・保章氏》「以星土弁九州之地所封、封域皆有分星、以觀妖祥」句下鄭注を参照。鄭樵は左氏が戦国時代の人である理由の一つとして、「大梁」の語が《左伝》に見えることを挙げる。それは戦国時代に入って弱体化した晋が滅んで韓・魏・趙の三国が成立したのであるから、趙国の存在を前提とする記述が春秋時代の人によって書かれているはずがないからである。

(33) 《左伝・襄公二十六年》において声子が長々と弁明している相手は楚の令尹子木（屈建）なので、引用原典における「声子説齊」句の「齊」字は「楚」の誤りと判断した。なお、皮錫瑞は《春秋通論》第二十三条《論趙匡鄭樵弁左氏非邱明左氏伝文実有後人附益》において鄭樵の文章を引き、「声子説齊」句下に「当作楚、此誤」と注記している。

(34) 底本は「游悦」に作るが、引用原典が「游説」に作るものでこれに従う。なお、①文の時点では「遊説」に作っていたが、②文から「游悦」に改められている。

(35) 底本の句説が「如『楚師燿猶藩拾』等語」となっているのによれば、張舜徽は「楚師燿猶藩拾」を一連なりの句と見ているが、訳文に注記したように、「楚師燿」と「猶藩拾」は《左伝》の中で互いに離れた所にある全く無関係の句である。「楚師燿」が楚に關係があることは自明だが、「猶藩拾」は魯の国で火災が起こった時に大夫の富父槐が発した言葉の一部であり、「《左氏》之書、序晋・楚事最詳」句との關係が判然としない。《六経奥論》の著者が錯覚を起こしている可能性がある。

(36) 鄭樵《通志・総序》に「左氏、楚人也、所見多矣、而其書尽楚人之辞」とあるように、左氏が楚の人であるというのは、鄭樵の持論である。

(37) 蘇轍《古史》卷二十五《管晏列伝第二》と王応麟《漢芸文志考証》卷六《管子八十六篇》条「恐是亡篇之内而遽見之」句下注を参照。

(38) 朱熹《儀礼経伝通解・目錄》「鐘律第二十二」に「古無此篇、今以六芸次之。凡礼之通行者、已略見上諸篇矣。此後當繼以樂、

張舜徽《宋代の学者の学問が備えていた広大なスケールと後世の学界のために切り開いた新たな道》翻訳稿（上）（水上）

而《樂經》久已亡逸、故取《周礼》鄭註・《太史公》・《淮南子》・前後《漢志》・杜佑《通典》之律呂相生長短均調之法、創為此篇、以補其闕」とある。

(39) 中国において輯佚が始まったのはいつか、という問題は、あまり議論されておらず、張舜徽と同様に南宋の王応麟に始まる、とする見解が主流になっているようである。曹書杰《輯佚起源新探——輯佚学研究之二》《古籍整理研究學刊》一九九〇年第四期）は、呉楓《中国古典文献学・輯佚書》の指摘を参考にして、晋の梅賾が献上した《偽古文尚書》や同じく晋の楊方が輯成した《五經鈎沈》が輯佚の走りであると主張するが、論証が十分とは言えない。

(40) 原文「辨章學術、考鏡源流」は、章學誠《校讎通義・序》に見える言葉。

(41) 朱熹は《孝經刊誤》において、經一章の範圍における校訂の内容について、「今定此六七章者合為一章、而刪去『子曰』者二、引『書』者一、引『詩』者四、凡六十一字、以復經文之旧」と説明している。

(42) ここまでの記述、王明清は、周密《齊東野語》卷十二《書籍之厄》の以下の記述を参照している。

宋室承平時、如南都戚氏・歷陽沈氏・廬山李氏・九江陳氏・番禺呉氏・王文康・李文正・宋宣猷・晁以道・劉莊興、皆号藏書之富。

「南都戚氏」以下は、いずれも宋代の藏書家であり、戚氏は戚同文、沈氏は沈立、李氏は李常、呉氏は呉良嗣を指す。

(43) 《漢書・叙伝》に「目錄」の語が見える。

(44) 王鳴盛《十七史商榷》卷一《史記一・史記集解分八十卷》に「目錄之学、学中第一緊要事」とある。

(45) 《通志》卷六十三《芸文略第一・經類第一・易》の下に「古易・石經・章句・伝・注・集注・義疏・論說・類例・譜・考正・數・図・音・讖緯・擬易」と都合、十六種の項目が立てられている。

(46) 《通志》卷六十三《芸文略第一・經類第一・詩》の下に「石經・故訓・伝・注（集注附）・義疏・問辨・統說・譜・名物・図・音・緯学」と都合、十二種の項目が立てられている。

(47) 《通志》卷六十七《芸文略第五・道家》の下に「老子・莊子・諸子・陰符經・黃庭經・參同契・目錄・伝・記・論・書・經・科儀・符籙・吐納・胎息・内視・道引・辟穀・内丹・外丹・金石藥・服餌・房中・修養」と都合、二十五種の項目が立てられている。

(48) 《通志》卷六十九《芸文略第七・医方類第十》の下に「脈經・明堂鍼灸・本草・本草音・本草図・本草用藥・採藥・炮炙・方書・单方・蕃方・寒食散・病源・五藏・傷寒・脚氣・嶺南方・雜病・瘡腫・眼藥・口齒・婦人・小兒・食經・香薰・粉沢」



と都合、二十六種の項目が立てられている。

(49) 孫星衍を含む清代の考証学者による図書分類の考え方については、ベンジャミン・エルマン著、馬淵昌也ほか訳《哲学から文献学へ…後期帝政中国における社会と知の変動》第五章第四節〈学芸の分類〉(知泉書館、二〇一四年)において論じられている。

正誤表(頁数は底本による)

- \*二一六頁第18行 「尚書序」↓「尚書」(引用原典に「序」字無し)
- \*二一七頁第9行 「卷一」↓「卷八」
- \*二一八頁第10行 「成伯璵」↓「成伯璵」
- \*二一八頁第10行 「詞人」↓「詩人」(引用原典に従う)
- \*二二〇頁第21行 「秦漢」↓「周秦」
- \*二二一頁第11行 「說齊」↓「說楚」
- \*二二一頁第12行 「游悅」↓「游說」
- \*二二三頁第19、20行 《文集》卷三十八〈答李季章書〉↓《語類》卷一百三十五〈歷代二〉
- \*二二五頁第18行 「劉仁傑」↓「吳仁傑」